

令和 4 年 № 79
春ひがん号

あきばさん

発行人 / 発行所
秋葉山 新井 寺
272-0144
千葉県市川市新井
1 丁目 9 の 1
電話 047-357-8319
FAX 047-357-8399
mail: info@shinseiji.jp
http://www.shinseiji.jp
郵便振替 00150-2-282968

暑さ寒さも彼岸まで

当山住持



時間はまたたくまに過ぎ、令和四年も早、「暑さ寒さも彼岸まで」の春彼岸を迎えました。世の中は、今もなお、世界中がコロナ禍に見舞われ、その影響を受けて人生が、日常生活が、何かにつけて思うにままならず、四苦八苦して苦しみや悩みに困憊こんばいしています。

また、世界平和の祭典であるオリンピック・パラリンピックが中国・北京で開催されましたが、こともあろうに、世界大国の一つであるロシアが隣国ウクライナに武力をもって侵略し、かけがえない人命への攻撃や貴重な建造物・施設などの大量破壊を行なうなど、あたかも戦争状態となっています。人類の永久の願いである「平和」に世界が逆行しているかのようです。私たちの宗教・信仰の世界の本質である心正しく心豊かな平和な世界ともかけ離れているようです。一日も早く平和な世界が訪れることを切に祈念申し上げます。

さて、「お彼岸」については、毎年毎年、春と秋に日本で行なわれている仏教的恒例行事です。お釈迦様から継承されたお祖師様方の尊く有難い仏教の教理を正しく学び、実行することが、ご先祖様への報恩供養であり、その功德を受けて、

自分自身の心の修養、平和へのお導きと
なります。

どうぞ、例年、体験しておられる「お彼岸」の行事をさらに幾重にも予習・復習され、皆様方の心のよりどころ、人生の「たからもの」として活用されてはいかがでしょうか。

お彼岸の行事は、原則的には春秋・年に二度・一週間ですが、本来は、一年を通して毎日毎日が常にお彼岸であり、皆様の平和のひとときです。どうぞ、平和な彼岸の世界に到る道である六度の修行をこの上なく実践されて、日常生活を人生を、心豊かに平和にご精進ください。

合掌

六波羅蜜

彼岸へ到る修行の徳目

- 布施ふせ (見返りを求めない施し)
- 持戒じかい (教えを実行し他者を思いやる)
- 忍辱にんにく (耐え忍ぶこと)
- 精進しょうじん (たゆまぬ努力)
- 禅定ぜんじょう (ブレない心)
- 智慧ちえ (真理をみきわめる)

わたしたちの曹洞宗

「わたしたちの曹洞宗」第五回は、お釈迦さまについて学んでみましょう。

◆ 誕生 「天上天下唯我独尊」

お釈迦さまは、今から約二五〇〇年前の四月八日、現在のネパールにある「ルンビニ」の、色とりどりの花々が咲きそろうお花畑でお生まれになりました。天は、甘い雨を降らせて誕生をお祝いしました。このエピソードにもとづいて「花まつり（降誕会）」では、お花を飾った花御堂に誕生仏をおまつりし、甘茶をかけてお祝いします。生まれたばかりのお釈迦さまは、七歩歩まれて天地を指さし「天上天下唯我独尊——すべてのいのちはかけがえがなく尊い——」といわれました。



「釈迦誕生仏像」

作：仏像彫刻師 真野明日人
出典：仏像彫刻 MANOWORKS

それは、わたしたちは、お互いに比べることができない尊い存在なんだというメッセージでした。

◆ 出家 「四門出遊」

お釈迦さまのお母様は、お釈迦さまが生まれて七日目に亡くなってしまったと伝えられます。もの心がついたときには、お釈迦さまのそばには、お母様はいらっしゃらなかったのです。釈迦族の王子として生まれ育ち、何不自由のない生活をしてきたかのように見えたお釈迦さまですが、心が満足することはなく、もの思いにふけることが多い子ども時代、青年時代を過ごしていました。お母様を早くに喪くされたことが影響していたのかもしれませんが、心配されたお父様は、お釈迦さまには、人生の苦しみやつらい一面をできるだけ見せないようにしていたのですが・・・。

ある日、お釈迦さまが出かけようとお城の東の門を出ると、年老いた人に出会います。その姿は、髪は真っ白で、杖にすがり、背中也曲がり、足を引きずっています。お釈迦さまは、お供の人に「あれは何だ？」と聞きます。お供の人は「老人です」と答えます。さらに、「わたしたちは、みんな、いつか、あのようになるのか」と尋ねると「はい。人はみんな歳をとります」と言われてしまうのでした。

また別の日、南の門を出ると、今度は道端でうずくまっている病人に出会います。「みんな、病気になるのか」と尋ねると、「病気になる人はいません」と。

さらに別の日、西の門を出ると、今度は、お葬式の行列に出会います。行列に連なる人たちは、みんな声を上げて泣いています。そこで、「すべての命あるものは、いずれ死ぬのです」とお供が言うのでした。

そして、また別の日、北の門を出て出かける時、粗末な衣をまとい、手には鉢をもった人が立っていました。穏やかな顔で、悠然とした出家者の姿でした。

その姿に感動したお釈迦さまは、何もかも恵まれた、うわべだけの快楽に明け暮れた生活を捨てて、ついにお城を出られます。人は、だれもが、若い、病を患い、やがて死にゆく。お釈迦さまには、そのことがとても衝撃的なことだったのでした。なぜ、人は苦しみ、かなしまなくてはならないのか。ほんとうのしあわせとはなんだろうか・・・。苦しみや不安を乗り越える道、ほんとうのしあわせを求めて、出家されたのでした。二十九歳のときのことでした。

◆ 成道

それから六年間、お釈迦さまは「断食」などの苦しく厳しい「いのちがけ」の修行を続けました。からだは、すっかり痩せ衰え、骨と皮だけになっていました。こんな

ふうに、極端にからだを傷めつけても、何の解決にもならないと気づき、苦行をやめることにしました。

山を下りて、ネーランジャ河で六年間の汚れを落とし、からだを清めました。もう立ち上がる力さえも残っていません。そのとき、牛乳で炊いたおかゆ、「乳がゆ」を捧げるスジャータという娘さんに出会いました。お釈迦さまは、このお粥で元気をとりもどします。

そして、ガヤという街に赴き、大きな木の下にどっしりと坐禅を組んで坐りました。「道を得るまではここを立つまい」。そうかたく心に決めていました。七日目の朝、東の空に夜明けの明星が輝くころ、まっ暗な心の闇がしだいにはらわれ、深く心に抱えていた疑問もすつきりと解けていきました。ついにおさととりを得られたのです。三十五歳、十二月八日のことでした。



◆ 布教伝道 「忘病与薬」

それからの釈迦さまは、四十五年間、人びとのしあわせのために、教えを説く旅を続けました。どんな人に対しても、等しく道を説きました。どんな人の悩みにも答え、その人にいちばんふさわしい方法で教え導きました。

◆ 涅槃 「自灯明 法灯明」

八十歳になろうとしていたとき、生まれ故郷をめざし、最後の旅に出ます。そこには、「生まれ故郷に帰って死にたい」というおもいがありました。自らの死期を感じた釈迦さまは、おっしゃいました。

わたしの亡き後は、わたしが説いた教えを灯火とし、自分自身をたよりにして、生きていきなさい。

クシナーラに到着するとお釈迦さまは、お弟子様のアーナンダに床を用意してもらい、しずかに横になりました。

沙羅双樹は、季節外れのまっ白い花を満開に咲かせ、お釈迦さまのからだに、はらりと散り注いでいました。いつも吹いているさわやかな風は止み、川の流れも、かなしみをこらえているようです。お弟子様たちやお釈迦さまを慕う人びとだけではなく、木々、草花、あらゆる動物たちが、お釈迦さまのまわりにあつまってきました。

みんなが、深いかなしみに暮れています。お釈迦さまは、おっしゃいました。

なげいてはなりません。すべては、うつりかわってゆく。いのちあるものは、必ず死にゆくときがやってきます。愛するものたちも、必ず別れのときがやってきます。けれども、わたしが説いた教えを實踐するところに、わたしのいのちは、永遠に生き続けます。怠ることなく修行に励んで、完成させなさい。

このことばを最期に、お釈迦さまは、しずかにその眼を閉じられたのでした。八十歳、二月十五日。空には、まん丸の月が光り輝いていました。

三仏忌

お釈迦さまの記念日

● 四月八日 降誕会(花まつり)

お生まれになった日

● 十二月八日 成道会

おさととりを開かれた日
仏教のはじまり

● 二月十五日 涅槃会

亡くなられた日



◆ 最後の旅

お釈迦さまは、ご自分の死期をさと
り、故郷をめざした旅の途中、思い出
の深い街で、こんなことをおっしゃっ
ています。

世界は美しいものだ。

人間の生命は甘美なものだ。

自分が生きてきた風景に美しさを感じ、
人びとの恩愛に感謝をする。そして、
いのちの愛おしさを思う。

愈ることなく修行に励んできたから
こそのことなのか、苦しみに満ちあふ
れている世の中だからこそ、そこには
美しさや恩愛を感じる事ができるの
か、それとも密かに思い続けてきたこ
となのか・・・お釈迦さまのお心の中
は、はかりかねますが、ここに、お釈迦
さまの深いメッセージがこめられてい
るように思えます。

そして、誰よりもこの世の中の苦し
みや不安を感じていたお釈迦さまが、
晩年においてこのように語られたこと
を思うとき、わたしたちが日ごろ感じ
る不安や苦しみを乗り越える生き方は、
お釈迦さまの教えにきつとあるのだと
あらためて気づきます。

(副住職しるす)

これからのしんせいじの行持

どなたでも参加いただけます

三月二十一日 春ひがん法要

四月八日 釈尊降誕会

六月九日 先代住職報恩忌

七月十六日 おせがき法要

九月二十三日 秋ひがん法要

十一月十八日 秋葉火坊大祭

十二月八日 釈尊成道会

十二月三十一日 年越し坐禅会

※ コロナ禍により、変更や中止となる
ことがあります。

● 月例坐禅会 毎月第四日曜日
午後三時から

● 月例写経会 毎月第四土曜日
午前十時から

● 梅花講 (御詠歌) 月二回
午前九時半から

※ 坐禅会・写経会・梅花講は、現在
お休みさせていただいています。

テレホン法話

3月29日

～ 4月4日

「まのあたり」

副住職の法話です

フリーダイヤル

0120-508-740

携帯電話のかた

03-3454-5410

編集後記



地上波で放送されたデイズニールピクサ
ーの長編アニメーション映画「リメンバ
ー・ミー」を観ました。じつに深いメッセ
ージが感じられた映画でした。

メキシコの「死者の日」、「死者の国」を
舞台に生死を超えた「家族の絆」が描かれ
ています。「死者の日」は、亡くなった人
びとを称え感謝し、生きるよろこびをわか
ちあう祝日です。この日は一年に一度だけ
亡くなった人びとが生者の国の家族のも
とに帰ってきます。日本のお盆とよく似て
いますが、静かに偲ぶというよりも、皆が
再会を祝ってよろこぶお祭りのようです。

映画では、「生者の国」の祭壇に「写真」
が飾られていないと死者たちは帰ってく
ることができません。写真が飾られている
ことが、その人が忘れられていない証あかし
なのです。生きている人たちの記憶からその
人やその人の思い出がなくなってしまう
たとき、「二度目の死―永遠の死」を迎え
るといいます。ここが「わたしのことを忘
れないで、思い出して」という映画のタイ
トルにつながっているのだと気づきます。
亡き人たちとのご縁をたいせつにする
ことの深さを改めて学んだおもいです。

お盆の前に、また観てみたいと思います。
くれぐれもご自愛くださいませ。

編集小子 合掌